

140 億の脳細胞

柳平： 幼児の能力開発ということが、今、盛んに言われていますが、能力開発ということを一口で言えば、どういうことになりましようか。

時実： 結局、「一人一人の持っている能力を生かしきる」ということでしょうね。人間の大脳皮質には、140 億の神経細胞があります。これは、世界の総人口、36 億の 4 倍です。それが、ちょうど、新聞の 1 ページの大きさの大脳皮質に収まっているのです。

柳平： 人間の脳は、どのような仕組みで、どのように発達していくものでしょうか。

時実： 脳の働きをコンピューターにたとえますと、脳の働きには、ソフトウェアとハードウェアとあるのです。動物には、ハードウェアしかありませんが、人間には、ソフトウェアが備わっています。ハードウェアは、3 歳ごろまでに回路ができあがってしまいます。4 歳ごろから、ソフトウェアが作られていきますが、このころから、自分で何かをしたいという気持が起きてきます。ちょうど、第 1 回の反抗期というわけです。

ソフトウェアの働き

柳平： そうしますと、自発的に自分で何かを始めるころが、ソフトウェアの開発期と考えてよろしいのでしょうか。

時実： そうですね。そして、そのソフトウェアを使うことが、モチベーションですね。自分から何かをしたい、物を作りたい……と思うのは、ソフトウェアの働きです。これは、人間にだけあることで、他の動物にはありません。動物は本能だけしかありませんから、動物にはモチベーション(意欲)がないのです。

柳平： そうしますと、ゼロ歳の教育などということも、ハードウェアの形成期を考えますと非常に重要だということになりますね。

時実： “三つ児の魂百まで”と言いますが、3 歳ごろまでに、回路の約 70% ができてしまいます。ですから、3 歳までの環境は大変大切です。私は、ゼロ歳どころか、「マイナス 1 歳、マイナス 3 歳の教育が大事だ」と思っています。最近、子供は社会が見るべきだという勇ましい女性もいますが、私は、子供は親が自分の手をかけて世話することが大変重要なことだ、と思いますね。そういう点から言っても、親の心構えが大切です。自分に、子供を育てる資格があるかどうかをよく考えて、自分の子供は自分で面倒をみていく、という姿勢が必要ですね。ですから、私は、「マイナス 1 歳、マイナス 3 歳のころの、親としての教育が大事だ」と言うのです。